富士山静岡空港は本当に「赤字」か

～静岡でも始まった国際交流の経済効果と、隠れた教育効果～

鈴　木　　克　義

はじめに

2009年６月に開港した富士山静岡空港から、夏休みに家族を連れてさっそく韓国と北海道へ飛び立った私は、機内で印象的な光景を目にした。

おそらく、初めて飛行機に乗ったであろう小学生が、滑走路から空中に舞い上がった途端に手を叩き、「わぁ飛んだ、飛んだ」と歓声を上げたのである。

社会人になってから初めて飛行機を利用した私たちの世代とくらべ、すぐ近くに国際空港ができたこの子どもたちの世代は、今後バス旅行をするような感覚で、気軽に海外に出かけていくんだろうなと感じたものである。

さてその静岡空港、マスコミの論調では「開港１年目から大赤字」「就航１年未満で日航が撤退」「FDA も小松線撤退」と、まるで大失敗、税金の無駄遣いの見本のような扱いである。

年間の運営にかかる費用が約５億５千万円に対して、おもに着陸料による収入が２億円なので、差し引き３億５千万円の赤字というのだが、空港の収益というのは果たして、本体の収支のみで計れるものだろうか。

その後、私が夏に訪れた韓国の大徳大学から国際交流担当の教授が２名、静岡にやってきて、企業や経済団体のインターシップ担当者や、当時の常葉短大の学長にも面会していった。たまたまその時に、スタジオ見学に行ったテレビ局のキャスターが、ふと漏らした言葉が忘れられない。

「空港ができると、こういうことがいろいろ起きるんですねぇ」

そう、数字では表れない部分で、空港は静岡に見えない変化を起こしているようなのだ。

私が住んでいる葵区の瀬名で、「瀬名を英語が通じる街にする会」ができたのもその１つ。これはその後、「静岡を英語が通じる街にするプロジェクト」に発展している。

さらに2010年の夏には、大徳大学から28名の学生と２名の教員、それに１人の中学生がやってきて「語学研修」のため静岡に２週間滞在した。おそらくこれも、静岡空港がなければ起きなかったイベントだが、これを引き受けた私は、通訳案内士の資格を取って以来初めてのビッグプロジェクトを、通訳案内士の大先輩や元国会議員、静岡県立大の韓国人准教授など、さまざまな関係者、知人、友人の助けを借りて何とか企画運営し、無事に富士山静岡空港から仁川に送り返すことができた。

この研修旅行だけでも実はホテル代や飲食代、交通費などで500万円近くの経済効果を静岡と富士山麓にもたらしているのだが、今まで単なる「通過県」だった静岡に外国からの滞在客が訪れ、ガンダムや温泉、富士登山などを楽しむようになったという経済効果は計り知れない。若い世代への隠れた教育効果も含め、検証してみることにしよう。

正しく理解されていない静岡空港の価値

以前、福岡に住んでいて「街中から地下鉄で５分で行ける国際空港」の利便性を実感していた私としては、近々空港が開設される予定だった静岡への転勤は楽しみだった。

その後紆余曲折を経て、だいぶ予定より遅れた富士山静岡空港の開港だったが、オープン間近になってもあまり盛り上がらず、英語英文科の観光エアサービスコースの学生に聞いてみても「静岡空港を必要だと思う」学生は半分以下という有様だった。

理由を聞くと「静岡には新幹線があるから」「赤字なんでしょ」「海外はソウルと上海にしか行けない」というのが代表的な反応だ。

しかし新幹線で海外には行けない。中部や成田などの国際空港に行くには、速くても３時間、交通事情が悪ければ５時間以上かかってしまう。それに日本の新幹線は、世界でも珍しいくらいに運賃が高い。たとえば日本の700系とほぼ同じ車両を使っている台湾の新幹線（高鐵）は、台北から台中までの所要時間が約１時間で運賃は700元（約2,000円）、日本でほぼ同じ距離の静岡から東京は6,180円と、３倍以上かかる。JR で成田まで行けば９千円近く、つまり往復で２万円近い費用を空港に行くだけで支払っていることになる。

羽田を使う国内線でも、静岡県民は約１万３千円を払っているので、１回空港に行くのにかかる費用は平均して１万５千円といったところだろうか。

ところが静岡空港を使えば、静岡市内からクルマで40分で駐車場代は無料、シャトルバスでも片道1,000円である。その差は少なく見積もっても12,000円はあるだろう。

2009年の開港から１年間の静岡空港利用者は、だいぶ見込みを下回ったといわれたが615,000人である。空港への交通費の差額だけでも、12,000×615,000＝7,380,000,000と、70億円を超えている。つまり、３億５千万円の「赤字」の20倍以上の利益を、空港ができたお陰で静岡県民は享受していることになるのだ。

ちなみに空港の運営費用の５億５千万円というのは、県立高校１校分の運営費とほぼ同じだそうである。高校も統廃合が進んでいるが、高校１校分の費用で少なくとも70億円の利益を県民にもたらすならば、県のプロジェクトとしては効率がいいほうではないだろうか。

県立高校を「収入がいくら、支出がいくらなので黒字」と評価する人はいないと思うが、空港も学校と同様、公共財なのだから、本体だけの収支バランスで評価するのはいかがなものか。むしろ空港が県民にもたらす利便性や、観光客の増加による経済効果、さらにはグローバルな交流が当たり前になった若い世代への教育効果など、トータルな視点で空港の価値を判断すべきだろう。

しかもこの静岡空港、開業時から国際線が２路線、１日３便乗り入れるという、地方空港では初の「海外からの評価が高い」空港なのである。「ソウルと上海にしか行けない」というのは、飛行機に乗った経験が少ない人の誤解で、実は成田に行くより早い２時間でソウルの仁川空港に行けて、滑走路が４本もあるハブ空港から世界中に安く飛べるのだ。

最近やっと、この点を売りにしたツアーが発売され、アシアナ航空のソウル経由シドニー行き、ホテル代込みで10万円というツアーが好調に売れているそうである。

日本で海外旅行が自由化されて50年、やっと静岡からも気軽に行ける時代になった。

これからの日本は「観光」と「環境」

本格的な人口減少時代を迎え、これといった資源もない日本が生き残って行くためには、観光と環境に力を入れなければいけないと、常々私は学生たちに伝えている。

なぜならば、国内市場の減少や円高の影響で、企業がどんどん海外に出て行く中、唯一国内で確実に雇用が生み出せるのが観光だからである。いくら企業を誘致しても、円高になればすぐに海外へ逃げていってしまうが、たとえば富士山は、絶対に海外へ逃げ出すことはない。今も将来も、有望な観光資源なのである。

2010年の夏、７月と８月の２カ月間に富士山に登った登山者の数は、静岡県側の３登山道からの集計が23万人、山梨県側が約26万人と、合計49万人に達した。前年は天候不順で29万人、予想でも35万人だったのを遙かに超える躍進ぶりである。

この登山者数は、環境省が６合目から８合目にかけて設置しているレーザーカウンターによる集計なので、５合目の駐車場までバスで出かけて帰った観光客も含めれば、軽く50万人を超えるだろう。

この富士山ツアー、どこから出発するかにもよるが、首都圏発の日帰りツアーで８千円前後、山小屋に１泊すると１万２千円ぐらいからで、平均して１万円ぐらいだろうか。

さらに「山ガール」の流行で、上から下までブランド物の登山ファッションに身を固めた女性の場合、準備に10万円近くも使うのだそうだ。ま、そこまで行かなくてもきちんとした防寒服、バックパックに登山靴を揃えれば、軽く５万円は使うだろう。

合計６万円を50万人が使ったとすると、この夏の富士登山の経済効果は締めて300億円！…地元富士吉田市の一般会計予算を上回る額を、富士山１つで生み出していることになる。もちろん、年間を通じて山麓の観光地やリゾートホテルを訪れる客が地元に落とすカネも、これ以上あるはずだ。

富士山の引力に頼らなくても、アイデア１つで集客につなげることはできる。

2009年の夏、お台場の潮風公園に設置された実物大のガンダムが２カ月で400万人を集め、話題になったが、これこそは「ホビーのまち」静岡がやることだと思っていたら、2010年には東静岡駅前にパワーアップしたガンダム像が現れ、７月下旬からの１カ月間で猛暑にもかかわらず50万人を集め、翌年３月までの目標90万人の半数をすでに超えた。

静岡市では90万人の来場者で経済効果400億円と試算していたが、10月までの３カ月でその目標は達成し、３月までの10カ月間で200万人、経済効果は１千億を超えるだろう。ガンダム侮るなかれ、である。

私もちょうど公開から２カ月経った９月の休日に子どもを連れて行ってきたが、小雨にもかかわらず、まだまだ順番待ちの盛況で、近所の大規模小売店やビジネスホテルの駐車場には県外ナンバーが目立った。

韓国の大徳大学からの語学研修生たちも、このガンダム像を見学し、富士山に登っている。どうやら従来の「温泉とお茶・みかん」という静岡観光のイメージは、「ホビーと富士山」に取って代わりそうだ。いずれの観光地も、韓国や中国をはじめ、外国人客にとって人気のスポットになっている。

国際交流はもっとも効率のいい国防である

アメリカがイラク戦争で手痛い失敗をして以来、オバマ大統領は核軍縮を柱とする平和外交に力を入れているようだが、それは太平洋の真ん中のハワイでアフリカからの留学生と白人の母親の間に生まれ、イスラム圏のインドネシアで幼少期を過ごした彼の生い立ちに負うところも大きいだろう。イスラムの人間だからという理由だけで、銃を向ける気にはならないに違いない。

そのアメリカに本部を置く高校生の国際交流団体に AFS（American Field Service）というのがあるが、ここはもともとフィールド・サービス、つまり戦地の野戦病院で傷病兵の救護を行うボランティア活動として始まったそうだ。ところが戦争で傷ついた人間の世話をしているだけでは限界を感じ、戦争そのものをなくそうと、若い世代の交換留学を始めたそうである。

AFS 日本協会の元事務局長で現名古屋事務所長の大山守雄氏によると、つまりは仲のいい友人がいる国に対して、銃を向ける気にはならないだろうということだそうだ。

このことは、60年にも及ぶ AFS の歴史の中で、輩出してきた留学体験者の活躍を見れば理解できる。代表的なのは現在の広島市長で、世界に向けて核廃絶を呼びかけている秋葉忠利氏である。彼は高校時代に AFS で留学し、衆議院議員を経て広島市長となった。

他にも元外務大臣の川口順子氏や、塩崎泰久元官房長官夫妻も AFS 経験者である。

川口順子氏は現在、その堪能な語学力を活かして、キャンベラに本部がある国際機関「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会」の共同議長を務めている。

私も米国で 2 年間の教育を受けた留学経験者だが、あのアメリカと戦争を起こそうなどとは、夢にも考えないだろう。私自身、米国に本部を置く Friendship Force という国際交流団体の静岡支部に所属しているが、オバマ大統領と同様、ノーベル平和賞を受けたカーター大統領が設立したこの団体で、世界中からの親善大使の受入れを楽しく手伝っている。

今まではもっぱら、子育てに忙しかったこともあって受入れ専門に活動してきたが、2010年の夏には初めて、AFS でチェコに留学する予定の娘を同行して、イギリスへ親善訪問に行ってきた。滞在先は現地メンバーのお宅でのホームステイである。

忙しい中、私たち 2 人を快くもてなし、足の不自由な娘さんがクルマを運転して、私たちをあちこち案内してくれたご恩は一生忘れない。万が一イギリスと日本が一戦を交えるようなことがあっても（わずか数十年前にはそんなこともあったが）、あの笑顔の家族がいる国に対して、私と子どもたちは決して銃を取ることはないだろう。

AFS 日本協会の年間予算規模は、わずか13億円である。フレンドシップフォースは年会費 5 千円で運営しているので、静岡支部の予算はおそらく10万単位だろう。

対する日本の国防予算は 5 兆円。ケタが違いすぎて比べるべくもないが、もっと国際交流に人もカネも注いでくれたら、効率のいい安全保障ができると思うのだが…。

折しもその政府は事業仕分けで、20年以上続いてきた JET プログラムにメスを入れようとしているようだ。これは外国人助手を招致する事業自体の予算は 1 億 5 千万円で、人件費は各自治体が負担するので、低予算で欧米に日本ファンを多数育ててきた、効率の良い親善交流だと思うが、廃止するなら日本人教員を外国に送り出す費用に回してほしい。

韓国から静岡に、30名がやって来た！

静岡に空港ができるまでは、おそらくこんなことはなかっただろうと思うが、2010年の夏、韓国の大徳大学から男子学生が20名、女子学生が８名、付き添いの教員が１名と、おまけに女子中学生も１人やってきて、静岡に２週間、富士河口湖町に１週間滞在した。

目的は「日本語・日本文化研修」とのことだったので、４月に話が来た当初は「短大で受け入れて、自分の英文科観光エアサービスコースの授業と、日本語日本文学科の授業をいくつか聴講させればいいだろう」ぐらいに考えていた。

ところが学長に相談してみると、「受入れは無理」とのこと。人数が多すぎるというのが大きな理由らしいが、考えてみれば女子学生ばかりの英語英文科や日文科の授業に、男子学生がぞろぞろ入ってくるというのは、異様な光景だったかもしれない。学生に話してみると、観光エアサービスの学生などは韓国語を履修している者もいて、受入れに前向きだったのだが…。

そこで学園内の常葉学園大外国語学部や富士大などにも相談してみたのだが、「話が唐突すぎる」「うちはすでに韓国との交流はやっている」「日本語を教える専任教員がいない」といった理由で断られ、しかたなく通訳案内士の大先輩である神谷学院の神谷俊郎先生に相談してみた。

先生はさっそく、教育顧問を務める静岡産業大に打診してくださったのだが、ここも日本語を教える専任教員がいないという理由で断られてしまった。別に日本語の授業でなくても、日本語でやっている普通の授業を聴講させてもらうだけでよかったのだが…。

結局神谷先生のアドバイスもあって、私が非常勤で出講している静岡県立大経営情報学部の尹（ユン）准教授に受入れをお願いすることにした。尹先生はソウル出身の韓国人で、あまり準備期間もないこのプロジェクトを、二つ返事で引き受けてくださった。

県立大では尹先生に加えて地域経済がご専門の西野教授、それに県庁の新産業集積課の専門職員も紹介してもらい、かなり高度な講義を学生たちに聴かせることができた。それに加え、こちらでお願いした外部講師のための講義室や、歓迎パーティーのスペースも無料で貸してもらうことができたのは、元国会議員の方のご紹介で、県立大の府川事務局長と知り合いになれたことも大きい。いざ頼りになるのは、身内より外の人脈である。

その元議員からは、格安のホテルを紹介してもらうこともできた。

今回の語学研修、円高ウォン安の影響で予算的に厳しく、航空券代抜きの１人17万円で、21日間の研修のすべてを賄わなければいけなかった。単純に計算して１日８千円の予算で、宿泊費・食費から研修代、交通費までカバーしなければいけないのである。夏のピーク時に、８千円で泊まれる宿を探すことさえ大変なのに、全部込みとは…。

そこで相談したところ、清水の日本閣という、由緒ある日本旅館を紹介してもらえたのである。ここはＪリーグの小野伸二、川口能活といった名選手を下宿させて育てた旅館として有名で、ご主人の西川昭策氏に頼み込んだところ、１泊２食付き５千円でお願いすることができた。別館の、お世辞にも豪華とはいえない建物ではあったが、海の近くの落ち着いた旅館で韓国の学生たちは、親切なご主人夫妻とのコミュニケーションを楽しんだようである。いろいろ無理を聞いていただいたご主人には、感謝に堪えない。

大徳大学 日本研修旅行 旅程一覧表　2010/7/20～8/9（21日間）

常葉学園短大／静岡県立大　鈴木 克義

日付	イベント	場所	宿泊地
7／20（火）	10：45 静岡空港到着、県立大案内、歓迎パーティー		**日本閣別館**
7／21（水）	1・2限講義（西野教授、4314教室）、県立美術館見学		
7／22（木）	1限講義（牧野、4212教室）、蓬莱橋、村上開明堂工場見学		
7／23（金）	日本語／日本文化特別講義（鈴木、4212教室）、タミヤ見学		
7／24（土）	フットサル交流試合　安倍川花火大会（自由参加）		
7／25（日）	休日　ホテル・シーグランデに移動後、自由行動		**シーグランデ**
7／26（月）	法幢寺で「すっとんしずおか昔話」（東静岡）、ガンダム見学		
7／27（火）	紅葉山庭園でお茶会・宝泰寺・官庁街ツアー（齋藤佳代先生）		
7／28（水）	静岡県庁で講義（新産業集積課）、静岡市街地見学、日本平花火大会		
7／29（木）	NHK 静岡放送局、地震防災／交通管制センター、エイエイピー見学		
7／30（金）	SUZUKI 見学、川根温泉、大井川鐵道 SL 乗車、清水みなと祭り		
7／31（土）	由比観光＆1日合宿　冒険家・青山真虎さんの話		**浜石野外センター**
8／1（日）	移動日　韓国料理　白糸の滝　歓迎パーティー		**フィットリゾート**
8／2（月）	日本文化講義、町役場訪問、鳴沢氷穴見学		
8／3（火）	日本文化講義、シチズンセイミツ、東芝機械＆アウトレット見学		
8／4（水）	健康科学大学を見学　特別講義、富士登山		
8／5（木）	富士登山（下山）		
8／6（金）	富士急ハイランド		
8／7（土）	フリーデー（グループで計画を立てて行動）		
8／8（日）	イオン富士宮、富士山本宮浅間大社を見学して清水へ		**シーグランデ**
8／9（月）	9：00 シーグランデ出発　11：45 KE780便で静岡から仁川へ		

→この語学研修旅行の写真は、次のサイトで見ることができます。
http://gallery.me.com/refresh#100055

あこがれの富士山に登頂

語学研修の日程は別表の通りだが、よくぞこれだけのイベントを詰めこんだものだと、われながら思う。「休日が少ないじゃない」と、ツアコンの連れ合いにも指摘された。

「精密機械システム科」を中心に理系の学生が多かったので、自動車・機械関連の工場見学を4カ所（普通なら見学できないSUZUKI相良工場も、元国会議員の紹介で見学）、蓬莱橋や浅間大社などの名所旧跡、放送局や官公庁見学、美術館やお茶会などの文化体験、フットサルや冒険家・青山真虎氏指導によるキャンプなどの野外活動、温泉や白糸の滝、氷穴などの自然体験、そして極めつけは最後の週の富士登山である。

静岡での2週間はまだ私が短大の授業があって自由に動けなかったため、最初の週は午前中県立大で語学研修をしたあと午後社会見学、2週目はSBSラジオ劇団の大津座長、短大非常勤講師の齋藤先生、フリーアナウンサーの藁科さんなど人脈を駆使して学生たちの世話をしてもらい、午後からは私が合流するという形を取った。

宿は2週目から、英文科卒業生の親が経営している清水シーグランデを利用させてもらい、ここにも随分無理を言ったと思うが、JR清水駅の近くなのでどこに行くにも便利で、マイクロバスで移動する費用を節約することができた。

マイクロバスは運転手付きで1日借りると10万円近い費用がかかるので、節約のために私が中型免許を取り、大井川や富士山観光の時には自らハンドルを握って学生たちを連れて行った。マイクロのレンタカーは、1日3万円以下で借りることができる。

こうした節約の積み重ねや、3人のホストファミリーに女子学生2名のホームステイをお願いしたこともあって、何とか予算ぎりぎりでこれだけのプログラムを遂行することができた。ほとんどボランティアで協力していただいたみなさんには、心からお礼を申し上げたい。

8月に入ってからの最後の週は、異常気象で猛烈に暑かった静岡を離れて、河口湖の会員制リゾートホテルに会員料金で滞在することができた。富士山麓はそれこそ夏休みがピークなので、1泊1万円でも安いほうなのだが、ここも卒業生がお世話になっているマリア国際幼稚園のご紹介で、安く利用することができた。しかもテニスコートやプール、温泉などの施設利用もすべて無料である。

地元の富士河口湖町役場の訪問や、温かく迎えてくれたシチズンセイミツの工場見学、健康科学大学の体験授業など、すべてマリア国際幼稚園の庄司事務長のセッティングに依るもので、好評だった幼稚園でのバーベキューともども、お世話になりっぱなしだった。

そしてメインイベントの富士登山。この日は私が東京で企業研修の先約が入っていたため、午後から出かけなければいけなかったが、大徳大学で日本語を教えている鈴木泰次先生が助っ人で同行登山をしてくださり、庄司先生がマイクロバスを運転して学生たちを5合目まで連れて行ってくれた。

私は翌日、頂上でご来光を眺めた学生たちを迎えに、マイクロを運転して雲海を越え、5合目の駐車場で再会することができた。バスに乗り込んできた学生たちの顔は、徹夜の登山で疲れてはいたが、達成感でキラキラと輝いていた。

今回の研修、いろいろと大変だったが、私はお手伝いできたことを誇りに思う。

人材育成のため、国際交流大学「観光学部」「国際教育学部」を

今回の語学研修、民間の旅行会社や語学学校に依頼していたら、おそらく2倍以上の費用がかかったと思うが（参考までに常葉短大英語英文科のカナダ語学研修は3週間で45万円）、自分でやってみて痛感したのは、静岡はまだまだこうした「インバウンド」の研修旅行を受け入れる下地ができていないことである。

外国に出かけていく「アウトバウンド」旅行については、静岡はわりあい県民所得が高い県（東京、愛知に次いで3位）ということもあって従来から行われていたが、今まで空港がなく「通過県」だった静岡には、滞在型のおもてなしの経験が圧倒的に少ない。

リーズナブルな料金で学生を受け入れられる宿泊施設がないのもその1つだし（韓国の大徳大学には、学生が1泊1,500円程度で宿泊できるゲストハウスがある）、学生同士で交流させようという意欲のなさに関しては、静岡の教育関係者は目を覆うばかりである。

観光地に行っても、英語や韓国語で案内ができる人材はほとんどなく、外国語の看板はやっとチラホラと見かけるようになったばかりだ。

そこで提案だが、「おもてなし」を含めグローバルな交流を行える人材を育成するため、「国際交流大学」を静岡に設置してはどうか。そこでは授業は原則英語で行い、近隣の国と交流するために韓国語や中国語も選択必修とする。学部は静岡にぜひとも必要な「観光学部」を中心に、国際機関や国際ビジネスの場で働ける人材を養成する「国際教育学部」も設ける。付属の幼稚園、小学校（将来は＋中学校）では英語ですべての教科を教え、「英語でディベート」ができるくらいの語学力と交渉力を持った人材を育てるのである。

もちろん、そこで「英語で教える」人材も国際教育学部で養成する。「国際交流大学」らしく世界中からスタッフを集め、学生も半数くらいは外国籍にしたい。静岡のキャンパスで、文字通り「国際交流」が実現するのである。

「英語で授業」なんて静岡では無理、と思われるかもしれないが、実は秋田県の郡部に「国際教養大学」という新設大学があり、2004年の開学以来2回卒業生を出しただけだが、就職率は100％を誇っている。なぜ大企業がこぞってこの大学にリクルートに来るかというと、この大学では原則授業を英語でやっており、あのハーバードの授業のように、ほとんど「英語でプレゼン＆ディベート」ができる人材が育っているからである。

秋田でできることが、静岡でできないはずはない。

実は山梨県の富士山麓で、この計画はすでに進んでいる。「英語の幼稚園」はすでにあり、現在「英語の小学校」の設立申請を文部科学省に出す段階である。もちろん、教員養成の大学設立も視野に入っている。

山梨でできることが、静岡でできないはずはない。

あとは決断力とスピードである。

参考文献

・ウイリアム・ブリアー（2010）「JETプログラム　日本を広める『第3の波』」、朝日新聞
・鈴木克義（2010）「英語は小学校からでは遅すぎます」幼年教育出版